
神様と狐の子

鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様と狐の子

【Nコード】

N1263N

【作者名】

鈴木

【あらすじ】

森の中をお散歩していたら、母様と父様を食らった怖い人間の、篠に会ってしまった！そんな子ギツネのお話。

第一話

「いいかい、君の父様も母様も、怖い怖い人間の篠というやつに食われてしまった。だから、絶対に、篠という人間には近づいてはいけないよ。わかったね」

第一話

散歩をしていると妙な事があるものだ。

俺は頭上から落ちてきた人間の子に潰されたまま、そんな事を思った。

ふさつとした髪の毛が俺の目に入り、思わずあいていた左手で目をする。

みるところ、女の子のようだ。長めの髪の毛に小さな手、肩からポシエットを下げており、中に入っていたであろうどんぐりの実がこちらこちらに散らばっている。俺はなおも潰されたまま、そのうちの一つを拾うと、重いのを我慢しつつ絞り出したような声でこういった。

「お嬢さん、どんぐりが落ちましたよ」

まあ、実際に落ちてきたのは君の方ですけどね、と言いたいのを我慢してどんぐりを彼女のもとに持っていくと、それまでぎゅっと睨られていた彼女の目がゆっくりと開かれ、次第にそこに水がたまりだした。俺が「嫌な予感が」と思ったときには既に遅く、手渡したどんぐりをぎゅっとつかんだまま、女の子はわあわあと声を上げて泣き出した。

「え、ちょっと、君ーほらほら、何も怖くないよー？ も、もしか

してどこかぶつけちゃったかなー？ えっとーいないいないばあー？」

慣れない状況、というより、一度も遭遇した事のなかった事態にあたふたしながら俺は彼女を喜ばせようとしたが、彼女が泣き止む事はなく、ただただ彼女が上に乗っている腰が痛いまま、時間はゆっくりと流れていった。

「お、落ち着いたかい？」

俺は腰の上の子が「ぐすんぐすん」ではなく「ふす、ふす」と落ちて着きだした頃に、半ば泣かれる事を恐れながらそう聞いた。すると彼女はまるで「あらこんなところに人が！」というような目で俺をみると何を思ったか「どぐり…」と言って俺の背中から飛び起きた。いきなり重さから解放された俺は無意識に背中をさする。

「どぐり？」

「どんぐりー！ 拾わなきゃ！」

「え？あ、ああ、どんぐり。そっか。手伝うよ」

二人で数十個のドンぐりを黙々と拾っていると、女の子の方が先に沈黙を破った。俺の方をじっとみて、それから首を傾げて「人間様？」とつぶやいた。

「様、はいらないんだよ。俺は篠だ。君は？」

「し、の？」

「そう、篠だ。よろしくね。君は、女の子だよ？お名前は…」

そう俺が言い終わる前にその子はヒツと小さな声で言うと、ポシエツトにどんぐりを無理矢理つめて走り去っていった。一人その場に

残された俺は、何がなんだ分からず、静かに背中をさする事しか出来なかった。

第一話（後書き）

だ
っ
て、篠
っ
てい
っ
たら、父
様
や母
様
を食
ら
っ
た怖
い人
間
じ
ゃ
な
い
！

第二話

「兄さま兄さま！ 今日、篠という人間に会ってしまいました！」

第二話

篠という男から一目散に逃げてきた私はドングリ拾いも途中で放り出して帰ってきた。

いきなり走って帰ってきた私を兄さまは驚いたようにみていたが、事情を話すと今度は違う意味で目を丸くして私に怪我がないかを確かめた。

「それは、本当か？ 大事ないか？」

私が「帰る途中に膝を少し擦りむいただけです」というと

兄さまはほっとして表情をゆるめた。

「篠はおかしなお方でした！ 私が落ちたら下にいたんです！」

兄さま、篠は術でも使うのでしょうか？」

「それはきつと上からお前が降ってきたんだろう。さぞかし怒っていたのではないか？ よく逃げて来れたものだ」

そういうと兄さまは私をぎゅっと抱きしめてくれた。右股あたりに何か固いものがあったり、自分がどんぐりを持ってかえってきた事を思い出すと、私はすぐにそれを手に取り兄さまの胸に押し当てた。最も、拾ったうち、半数はあの場に置いてきてしまったのだが。

「兄さま、篠はどんぐりを拾って下さいました。一緒に！」

「怒っていたのか？」

兄さまはドングリの入ったポシエットを受け取ると、静かに私にそう聞いた。

「えーと、あまり怒っていなかった気がします」

「馬鹿な。きつととても怒っていたんだ。本当に逃げ切れてよかった」

たな。奴にはもう二度と会ってはならないよ。今度こそ食われてしまうからね」

私はそれを聞くと、ああ人は見かけによらないのだな、と身を震わせた。

兄さまと私は、この森の奥で静かに暮らしている。元々は、母様と父様も一緒だったのだが、篠という人間に殺され、食われ、いなくなってしまった。兄さまからずっとその話を聞かされていた私は、篠という人間の存在は恐れていたし、近づこうとも思わなかった。だから、今日とてわざと篠に会いにいった訳ではない。たまたまどんぐり拾いに専念していたら、足を滑らせ、篠に遭遇してしまったのだ。名を聞いたときの、あの何とも言えない恐怖感は今でも忘れられない。

けれども、彼が襲ってこなかったのも事実だ。篠は一緒にどんぐりを拾ってくれたし、下敷きにしてしまった事をとがめる事もなく、訳もないのに泣きわめく私をうるさいとしかる事さえせずに、ただ静かに、私の下敷きになっていた。その点では兄さまの話とは合わない箇所が多く、私は首を傾げるばかりだった。

翌日。

今日は兄さまが、少し人間の里に下りてくるというので、私は静かに家で留守番をする事にした。食料が少なくなる冬に備え、いろいろな物を蓄えておかねばならないのだが、やはり親なし兄弟が自力で探すのには無理がある。そこで、少し人の手を借りようと、毎年この時期になると代わりばんこで里を降りるようにしているのだ。

「うーん、でも、兄さまがいないとやる事はないし」

いつまでも家にいてゴロゴロしているのはつまらない。そう思った私は、お気に入りのポシェットを下げると、元気よく玄関から外に飛び出していった。兄さまがかえってくるのはおそらく午後。それまで、いつものようにどんぐり拾いをしてこよう。きっと、昨日よりたくさん拾って兄さまにあげれば、喜んで受け取ってくれるだろうと思いつながら。

第二話（後書き）

読み返した感想・冒頭の子ギツネちょっと嬉しそうなんですが一応焦ってる設定です……。

第三話

昨日と同じ体勢。昨日と同じ子。昨日と同じパターン。
本日も、また、彼女が降ってきた。
ただ今回違ったのは、彼女がけがをしてしまったという事。

第三話

わあわあと彼女が泣くのはもうお決まりのようで、俺はじつと彼女が退いてくれるまで下敷きになるしかないと思っていた。しかし、洋服の裾に何やら赤い液体がぽたりと落ちてきたときに、あれ、思っ
って彼女の足下に目をやると、血が出ていた。

「あれ、こりや痛いねえ」

そういうと、彼女ははっとして、俺の方をみる。それからとんでもない物と遭遇してしまった、という表情をすると、今度はガタガタと震えだした。小さな口からは、しきりに兄さま兄さまという言葉が発せられている。俺は近くにあった笹の葉を彼女の患部にあて、つるでしっかりと固定すると、これでもう大丈夫だと言った。が、彼女の不安げな表情がなくなる事はない。

「も、もしかして迷子？ あれ、それとも寒いのかな？」

「篠に、会っちゃった」

「そうだね、また会っちゃったね、偶然って面白いね。名前覚えていてくれたんだ」

そういつて俺は彼女に背中から降りてもらうと、事情を聞こうとした。どうして昨日は走って帰ってしまったのか、なぜそんなにもおびえているのか。もしかして俺は怖い顔でもしているのか。しかし、それらを聞く前に、彼女の方が先に口を開いた。

「篠、狐を食べちゃうの？ 狐を食べてもおいしくないんだよ？」

「え」

「篠は、父様と母様を食べたんでしょう？ 私も食べちゃうんですよ？」

「どうしてそう思うの。こう見えて俺は肉が食べられないんだよ」

「そーなの？」

「そうなの」

「じゃあ母様と父様を食べたのは篠じゃないの？」

「篠じゃないよ」

「なあんだ！」

そういつと彼女は先ほどまでの泣き顔を空の彼方へ吹き飛ばし、一気に笑顔になった。それから自ら自己紹介までしてくれた。春生まれの彼女は生まれて間もなく父母を篠という男に殺され、今は兄とひっそり生きている。昨日は兄の為にどんぐりを拾っていたが、途中で足を滑らせ転落してしまい、おまけに下敷きになった人が篠という人間だったから一目散で逃げ去ったらしい。

「そうか、それで昨日は走っていつてしまったんだね」

「うん」

「それで、名前は？」

「名前はないの。私はいつも兄さまとしか呼ばないから、兄さまも私を妹、って呼ぶの」

「そうか、じゃあ俺がつけてもいいかな？」

「うん、いいよ！」

「じゃあ君は菰だ。すずな。春に咲く花の一種なんだ。君は花とか好きそうだからね」

「お花は好きだよ。篠は花、好き？」

「俺も花は好きだよ。特に菰はね。小さくて黄色い花なんだ」

「ふうん」

そっぴいながら菰は少し誇らしげに立ち上がると、とってきたどんぐりを見せてくれた。

兄の為にせつせととっていたのだろう。小さなどんぐりが数十個ポシエツトから顔をのぞかせていた。

「篠、私ね、人間の格好をしているけれど、本当は狐なの！」

「うん、知ってたよ」

だつてさつき、君は自分で「狐はおいしくない」と突拍子もなく言つたからね。

「篠、狐とも仲良くしてくれる？」

「もちろん」

「そっかあ！ じゃあ、また遊びにくるね！」

そっぴいって菰は小さく手を振ると、元気よく森の奥へと走つていった。

俺は、その姿をにこやかに見届けると、静かに森の反対側へと歩いていった。

第四話

篠の事は二度と口に出さない。そう固く決めた日だった。

第四話

「ただいま」

そう言った兄さまの声で私は目が覚めた。

篠と別れた後、真っ直ぐ家に帰った私は拾ったドングリの数を数えながら兄さまの帰りを待っていた。

しかし予想より帰りが遅かったために、退屈して机に突っ伏した状態で寝てしまったのだ。

私はゆっくりと顔をあげると、目を擦りながら兄さまの方を振り返った。

「お帰りなさい、兄さま」

「すまない、起こしてしまったね」

里に食糧を取りに行っただはずの兄さまは、荷物一つ持たずにそこに立っていた。

手には切り傷ができています。大したけがではないが、いつも慎重な兄の身に何かがあったのは一目瞭然だった。

「兄さま？その傷、」

「僕も篠にあつたよ」

「え？」

突然のことで私は思わず首をかしげる。それから、何だか状況がよくわからないまま口を開いた。

「兄さまも篠に会ったのですか？私も今日、また篠に会いましたよ。良い方でしょう？」

そう言い終わる前に、兄さまは血相を変えて私に飛びかかった。

私が両手に持っていたドングリはパラパラと床に落ち、兄さまはそれを踏みつけて私を怒鳴った。

「お前は僕が昨日なんといったかもう忘れたのか！ 奴には会うなと言っただろう！」

「に、兄さま」

「この手を見る、僕は今日奴に襲われたのだ！ 絞め殺されかけた！ 必死の思いで逃げてきたのだ！ 篠はいい奴？ 冗談じゃない！」

「で、でも篠は狐を食べたりしないって……」

「そんなの嘘に決まっているだろう！」

そういうと兄さまは顔を真っ赤にしたまま椅子に座った。それから私を睨み、向かいに座れと命令した。

「いいか、現に僕は篠に殺されかけているんだ。お前は僕に死んでほしいのか？お前は篠に殺されたいのか？」

「そんなわけ……」

「だったらもう一度言っ。二度と篠には会うな。二度とだ。わかったな」

初めて見た兄さまの一面に怯えきった私は、はいと答えることしかできなかった。

「で、それでもここにいるのは如何してだい？」

苦笑しながらそう問う篠に、私はよく解らないと答えた。

兄さまが篠に襲われたあの日から、私は懲りず篠に会いに来ている。

もちろん兄さまが「篠に襲われた」と主張している事を彼に言えるはずもなく、今は「兄さまが幼い私を外に出したくないと言っている」と言うことにしている。

本当のことを伝えてしまつたら篠は私と関わってくれなくなるかもしれないし、彼が兄を襲つた犯人だと確定したわけではないのだ。少なくとも私には、優しくて穏やかな篠が狐を襲うような凶悪な人間には見えなかったし、何より彼と過ごす何気ない時間を失いたくはなかった。

そんな曖昧な理由で、私は今日も森の奥の日の当たる場所で篠と会っているのだ。

「ねえ篠。篠はこの下の里に住んでいるの？　里の人間は、お仕事があるんじゃないの？」

「うーん、俺はこの森の奥に住んでるんだ。里の人とはあまり会わないね。でも稀に用事があつて山を下りることはあるけれどね」

「ふうん？　そうなんだ」

「崧は里に下りたことはあるのかい？」

「ないよ！　私はこの森から出たことがないの！」

「そうなんだ。それじゃあ、今度俺と一緒に里に下りてみようか？」

そう言つて篠はにつこり笑い、私の頭を撫でた。

第四話（後書き）

中途半端なところで切れてしまった…。

第五話（前書き）

所々の修正は後日致します。

第五話

昔、一度だけ弟が自ら俺に会いに来たことがある。

そうして、一つだけ問いを残して去って行った。

「あんたは友人と世界、どちらかを選べと言われたらどうする？」

第五話

「篠ー本当に変じゃない？ 私、ちゃんと人の子に見える？」

「大丈夫だよ、変じゃない。かわいいよ」

菰に初めて会った日から、早二か月が過ぎようとしていた。

狐の寿命は短い。そのせいか、彼女の内面的成長もとても速かった。当初はたどどしく会話もゆっくりだったのに、

今では人の子で言う12歳ぐらゐまで成長してしまっている。

その変化に戸惑う暇もなく、俺は毎日のように彼女と会っていた。

そして今日は、菰が初めて里に下りる日。

その話題が出た日からかなり長いこと悩んだ末、半月経った今日、ようやく兄に秘密で里に下りることを決心したらしい。

俺は菰が人間にうまく紛れられるように、隣町の仕立て屋で彼女に合う羽織を買ってきたのだが、

どうにも着慣れないせいか先ほどから何度も着ては脱ぎ、の作業を繰り返している。

その様子が何だか可笑しくて俺は何も言わずにじつと菰を見ていたのだが、それが逆に気になったのか、彼女は羽織を着たまま俯いてしまった。

「そろそろ行けるかい？」

そう俺がこらえきれなかった笑いを零しながら言つと、
崧は下唇を噛んだまま頬を膨らませて小さく頷いた。

「篠！ 見て！ これすごく綺麗！」

そう言つて山を下りた崧が一番に駆け寄つたのが簪を売っている小さな店だった。

俺はさすが若い、と苦笑しながら、走つて行つた崧を追いかける。

「お嬢ちゃん、これが気になるのかい？」

二人でたくさん並んでいる簪を眺めているときに、店主が崧にそう声を掛けた。

崧が見ていたのは黄色い簪。

あまり装飾品はついていないが、小ざつぱりとしていて綺麗なものだった。

しかし、いきなり聞きなれない言語で話しかけられた崧はびっくりして

簪から目を移さずにぐいぐいと俺の裾を引っ張つた。

仕方なく俺が崧の通訳をする。

「ああ、そうみたいです。綺麗な簪ですね」

「おや、あんたら兄妹かい？ あんたえらい美人さんだね、こりや嬢ちゃんも別嬪さんになるなあ！」

そう言つて店主ががはがはと笑う姿をきよとした顔で見上げる崧。

言葉が通じていないのだから、無理もない。

「ねえ、篠！ おじさんどうして笑ってるの？ 私の羽織がおかしいの？」

そっとう崧に笑いかけながら俺は懷から代金を出すと、その黄色い簪を買って店を後にした。

「崧、こっちを向いて御覧」

そう言つて俺が先ほど買った簪を刺してやると、崧はうれしそうに髪をなびかせて見せた。

「綺麗？ 似合ってる？」

「うん、似合ってるよ」

すると崧は誇らしげにふんぞり返ると、スタスタと山へと続く道を歩き出した。

相変わらず歩くのが早いな、と思いながら俺もそのあとを追う。

「崧？ もう里はいいのかい？」

「うん、このきらきらを篠がくれたからいいの！ これで十分！」

「そう？ ならいいのだけだね？」

半月も悩んだ結果ようやく今日里に下りることができたというのに簪一つでいいのだろうかとも思つたのだが、

まあ彼女が今満足げに胸を張って歩いているのだからいいか、と俺も納得をして二人で山へと続く道を歩き出した。

崧を無事家へと送り返した後、俺はいつも通り山奥の住処へと向かっていた。

崧は家に帰るまでずっと機嫌がよく、

簪を手を取っては着けてみたり太陽の光に反射させてみたりしていたのだが、

ようやく今回の下山は兄に話していなかったことを思い出して急いで羽織を脱いで俺に預けた。

簪を預けるかどうかは家に着くまでずっと悩んでいたようだったが、よほど気に入ったのだろっ、家のどこかに隠しておくことにしたらしい。

そして今、残された羽織を握りしめながら、俺は自分の住処の前に立っていた。

友人なんて長らくいなかった。ずっと一人だった。それをさみしいと思うことはなかった。

だからこそ、松の存在に戸惑っている自分がいるのには薄々気が付いていた。

会って二か月の彼女は俺の中で大事な「友人」になってしまった。

日に日に彼女の存在が自分の中で大きくなる。

毎日会いたいな、と思うようになる。

それでも。

「あんたは友人と世界、どちらかを選べと言われたらどうする」

松に会う前も、後も、あの問いの答えはずっと変わらない。

「そんなの、——に決まってるじゃないか……」

第五話（後書き）

またなんか妙な人出てきちゃいました弟君……。この話本当に時間が進むの早くて申し訳ないです……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1263n/>

神様と狐の子

2010年11月10日17時08分発行